Shinrin RANGER あきる野

森林レンジャーあきる野新聞

Vol.30
2012 年 12 月号
発行：森林レンジャーあきる野

紅葉が鮮やかになりました

～朝晩の冷え込みがだんだん厳しくなりつつ～

11 月の中ごろから朝晩の冷え込みが一段と厳しくなり、山の色彩の変化を楽しめる時期になってきました。緑色から黄色、赤色、茶色と色とりどりのグラデーションが山並みに広がります。個人的にあきる野の山はスギやヒノキの針葉樹が多く深緑の山というイメージがあるのですが、この時期になると深緑の中に赤や黄色に紅葉した木々が姿を現し意外な発見があったりします。「こんなところに広葉樹があったのか」というこの発見が次の山の調査につながったりします。

今回掲載した紅葉の風景写真は全て秋川沿いで撮影したものです。左上が青木平、左下が十里木、右下が小和田と秋川沿いには紅葉を楽しめるポイントが多数あります。

動物たちが活発に活動中です！！

～今、たくさん食べないと冬が越せません～

食べ物を探し道路を歩く年老いたタヌキ。目が良く見えないためか足元がおぼつかない。

厳しい冬を乗り切るために動物たちは、秋にいろいろなものをたくさん食べて体に脂肪をたくわえます。そのため、動物は秋になるといつも以上に食べ物探しに必死になります。先日も森の中で人が近づいてもさほど警戒せず、夢中になってクリを探すリスに出会ったりしました。どうやら、食べ物を探し冬に備えることの方がそのリスにとって重要なことのようです。このように、食べ物を探したり、食べているときの野生動物は静かにしていると近くで観察出来ることがあります。

また、この時期、親離れした若い野生動物もあちこちうろうろします。親の縄張りから追い出され新天地を探すのです。若い個体は経験が少ないので交通事故に遭ってしまう確率が高いような気がします。

秋の夜は特に野生動物が活発に動き回ります。自動車の運転には気をつけてください。

小さな森の世界
～花をつけない植物～

写真１

茎葉体…水分を吸収したり、光合成をする部位
胞子体…胞子をつくる部位

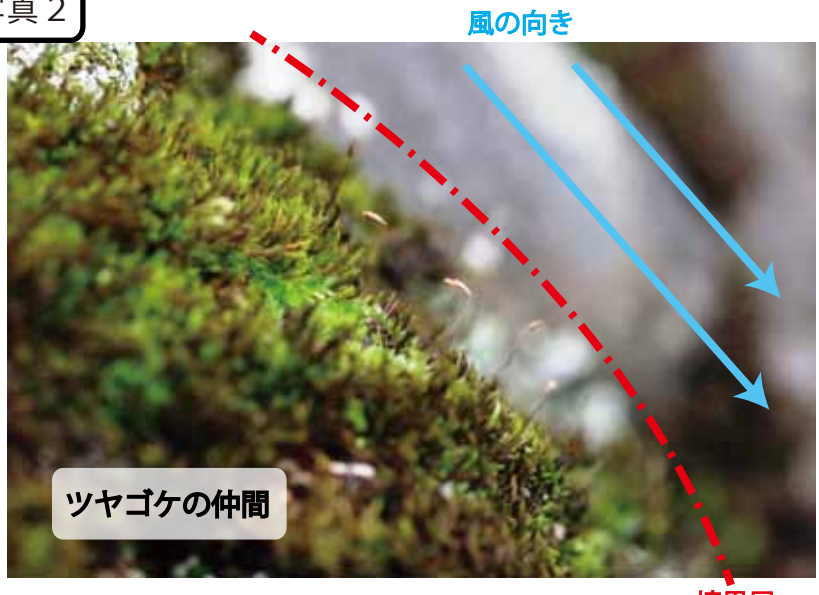
地球上に 40 万種の植物があります。そのうち 24 万種は、花が咲き実をつける一般的な植物（顕花（けんか）植物）です。残りの 16 万種は花を持たずに子孫を増やす隠花（いんか）植物と言われるもので、シダやコケの仲間に代表される植物です。

この仲間の植物は、平安の時代から日本人の心を和ませてきた植物で、今でもお正月の鏡餅の下に「ウラジロ」を敷いたり、夏の風物詩として「吊りシノブ」で風鈴を楽しんだり、庭石とコケで庭園を造作したり、その関わりは風情という日本文化をつくってきました。

顕花植物にくらべてコケの仲間などの隠花植物は、研究もあまり進んでおらず、未知の部分が多いです。しかし、コケの仲間は小さいことで自分の世界を構築して太古の昔から生きながらえてきた植物です。その生存戦略ゆえにコケは小さいのです。

まず、その形態からいうと、葉緑素を持った葉や茎に相当する部位と仮根からなっています。(写真１参照) この仮根は水分吸収だけではなく、植物体を固定する役割もあります。水分は仮根だけではなく、植物体全体で直接体内に取り込む仕組みになっています。当然、養分もその水分に含まれる無機養分を利用しています。葉から水分を吸収する仕組みは、逆に葉から水分を失うことも容易になります。

写真２



したがってコケは、湿度の高いところが生育の大きな条件になります。しかし、小さいがゆえに、森の中のごく小さな気象を利用しています。胞子体を伸ばして胞子を飛ばしますが、境界層ぎりぎりまで伸ばして胞子を飛ばすようにしています。（写真２参照）

森の中にも風が流れています。風にあたるコケはすぐに乾いてしまい、成長できなくなります。（乾燥しても休眠状態をとり、すぐに枯れることはない。）そこで、コケは風の流れの中で、地面の凹凸などでできる境界層の下で生育するように なっています。この境界層は地球の大気圏が宇宙と地球の境界を つくるように、乱気流のある林内の風と一定に保たれた湿度の部位を分けるのが境界層です。そのため、コケは 境界層の上に出て生育することができず、コケは小さくなります。

写真３